

江東の樹木 ⑤

亀戸梅屋敷と臥龍梅

江東区深川江戸資料館



『江戸名所花暦・亀戸梅屋敷』

梅は1年で最初に開く花ということから、「梅は百花の先駆け」といわれ、江戸に春の訪れを告げていました。江戸の人々は桜と同様に梅を愛でていましたが、特に文学をたしなむ人の間で、梅が鑑賞され和歌・俳句をはじめさまざまな作品に登場しました。

では、「江東の梅といえば」ということで、今回は亀戸にあった梅屋敷をご紹介します。

江戸名所・梅屋敷

梅屋敷は、もともと浅草埋堀（台東区浅草3丁目付近）の商人・伊勢屋彦右衛門の別荘でした。たくさんの梅を植えて整備し、子孫の喜右衛門の頃には300株ほどの梅を植え、清香庵と称しました。庭園のうわさは江戸中に広まり、徳川光圀（水戸黄門）や8代将軍徳川吉宗らが訪れるほどになりました。

ことに龍が地をほうようようにめぐっている見事な枝ぶりの梅が、臥龍梅と名づけられ（徳川光圀が名づけたといわれています）知れわたるようになりました。文政10年（1827）刊行の『江戸名所

花暦』にも「梅」の項の最初にこの梅屋敷を紹介しています。

「梅屋敷 立春より三十日目 本所亀戸天満宮より三丁程（約320m）東の方、清香庵喜右衛門が庭中に臥龍梅と唱ふる名木あり。実に竜の臥たるが如く、枝はたれて地中にいりてまた地をはなれ、いづれを幹ともさだめがたし。にほひは蘭麝をあさむき（欺き）、花は薄紅なり。園中梅樹多しといへとも、殊に勝れたり。四月の頃にいたれば、実梅と号て人々又なが（眺）む。」（カッコ内は筆者）

文中の「蘭麝」は蘭の花と麝香の香りのことで、たいへん良い香りを意味しています。数ある梅から放たれる香りと臥龍梅を始めとする見事な枝ぶり、美しく咲き誇る花のようすがよく伝わります。4月には実になったところを眺めたりと、花が散ってからも見物人を集めていました。臥龍梅は享保9年（1724）鷹狩に訪れた将軍吉宗によって、万世枯れることはないといったことから、代継梅とも名づけられました。

こうして梅の季節を中心に江戸の名所となった

梅屋敷ですが、残念なことに明治43年(1910)の水害で梅の木は枯死してしまい、梅屋敷は廃園となりました。

「梅」の名所

先述の『江戸名所花暦』では、梅の名所をいくつもあげています。まずは梅屋敷に近い亀戸天神があげられています。菅原道真の家紋にちなんで、梅はたくさん植えられています。

次に百花園があります。寺島村(墨田区東向島付近)に今も健在の百花園も、梅屋敷同様に町人が作った庭園です。文化元年(1804)中之郷の骨董商・佐原菊塙は寺島村に土地を得て庭園を開きました。ここには骨董商としての菊塙と親交の深かった文人が集い、サロンのような場となりました。亀田鵬齋・酒井抱一といった当時の作家・画家が集まり、語り合う中から隅田川(向島)七福神も考案されたといわれています。園の名も「梅は百花の先駆け」ということから抱一が名づけたといえます。現在でも梅に限らず萩や四季の花が咲く、都立の庭園です。

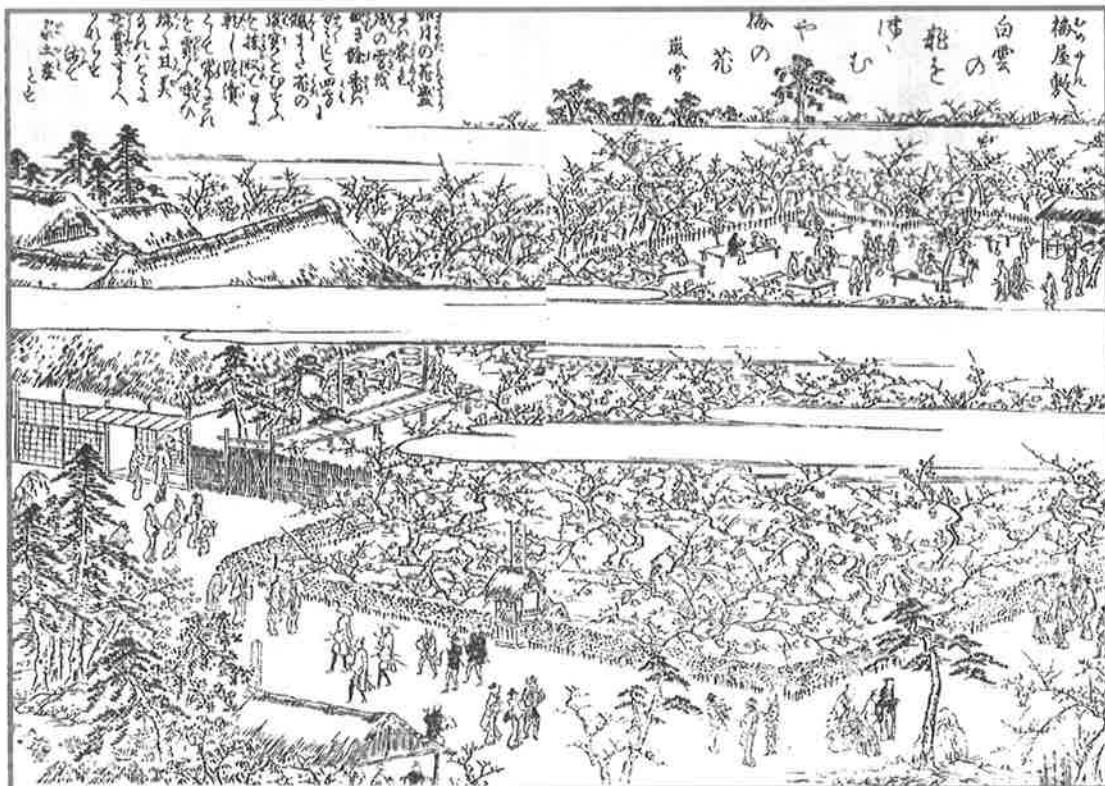
このほか本郷追分付近の駒込ウナギ縄手と呼ばれた所や芝増上寺中の松林院境内にあった茅野天神境内、麻布の白金付近にあった字米茶屋、麻布竜土町(港区六本木7丁目)の幕臣組屋敷、蒲田村といったところが梅の名所としてあげられています。

梅屋敷と亀戸

梅屋敷は、北十間川にほど近いところに開かれていましたが、その南側には亀戸天神や香取神社・普門院・光明寺・龍眼寺など寺社が集まる寺町が形成されていました。亀戸は江東区内でもっとも北にあたり、海浜の地として古代から村が開けていました。室町時代にはいくつかの神社や寺院がすでに創建されていましたが、江戸時代になって明暦の大火(1657年)以後におこなわれた、本所深川の開発による河川の整備で、亀戸の周辺にも北十間川・横十間川といった掘割が開かれ、川筋には道路も作られました。寛文元年(1661)には両国橋、元禄6年(1693)には新大橋と隅田川にも架橋が進み、江戸市中との距離も縮まってきました。

梅屋敷より東方の常光寺(亀戸4)は江戸以来六阿弥陀詣で知られた寺ですが、ここにある六阿弥陀道標は北十間川のほとりに建てられており、川舟を使って亀戸を訪れる人が多かったことを示しています。また梅や藤の亀戸天神、萩の龍眼寺(萩寺)といった花の名所も多く、周辺の田園風景の中に寺社の藪が並び、丹精された境内の花が興を添えるといったことで、行楽地として発展しました。

こうして亀戸は、それまでの農村としての性格に加えて、江戸近郊の行楽地としての性格を強めていきました。亀戸梅屋敷はこうした「江戸の行楽地・亀戸」を象徴する名所でした。



『江戸名所図会・梅屋敷』